

<書評論文>

ゴフマンとそのテキスト

Greg Smith (ed.), *Goffman and Social Organization: Studies in a sociological legacy*. (London: Routledge, 1999)

西 川 知 亨

はじめに

E.ゴフマン（1922-1982）は多くの人々によって戦後世代の最も重要な社会学者の一人と考えられて来た。自分の研究域を共在、すなわち「相互作用秩序the interaction order」（この言葉は本当の初期と晩年に用いられたただだが）に設定し、独自の方法でその秩序構造を記述していったゴフマンは、様々な論者によって様々な観点から論じられて来た。今回取り上げる『ゴフマンと社会組織』は、10人の気鋭の社会学者による、様々な観点から論じたゴフマンに関する論文集である。本書の構成を簡単に紹介すると、イントロダクションの役割を担うSmith論文、ゴフマンとその仕事との関係を論じたWinkin論文、男性の側からの女性に対する「公共ハラスメント」の諸相とゴフマンの概念の関係を論じたGardner論文、「役割距離」を「否定的自己」との関連でとらえなおそうとしたChris論文、『アサイラム』などに見られる精神病に関するトピックを扱ったGronfein論文、ゴフマンのエスノグラフィックな側面を再検討したManning論文、ゴフマンの社会学をエスノメソドロジの観点から「状況の定義」について考察したSharrock論文、同じくエスノメソドロジの観点からゴフマンの論証の方法について考察したWatson論文、「ノンパーソン」の概念からゴフマンの著述的側面について考察したTravers論文、ゴフマンとヴェブレンを比較してその生活、仕事、考えの受容などにおける類似点を指摘したFine論文、から成る。これまで、ゴフマンに関する論文は数多く数えられて来た。その多くはゴフマンのドラマトゥルギーであるとか、役割距離であるとか、フレームであるとか、その概念を内在的に紹介するものが多かったなかで、今回取り上げる論文集は、ゴフマンが自分のテキストを構築する際の問題についても十分に注意を払っており、いわば従来の実証主義的、経験主義的な面とは異なり、また一言でポストモダンという言葉でもとらえきれないようなゴフマン解釈を浮かび

上がらせている。今回は、本書で扱われているテーマのうち、生活史とゴフマンの仕事との関係、ゴフマンのレトリック、そしてゴフマンの社会学とエスノメソドロジーとの関係、の3つのテーマに沿って考察することにする。本書10本の論文のうち主に用いた論文はSmith論文、Winkin論文、Gronfein論文、Manning論文、Sharrock論文、Watson論文、Travers論文、Fine論文の8つの論文である。これら3つのテーマに絞って取り扱う理由は、これらのテーマが本書の複数の論文で取り扱われていること、そして何よりもこれらのテーマは相互に密接に関連しており、これらのテーマを同時に取り扱うことによって、3つのテーマ同士を有効な形で取り扱うことが出来ると思われるからである。

1. 生活史とテキスト

Winkinが言うように、ゴフマンは決して自分自身の生活については語らなかった。『日常生活における自己呈示（邦訳：行為と演技）』で成功をおさめてから著名な社会学者となったにもかかわらず、メディアに出ることを決して好まなかった。ゴフマン自身は生活と仕事は完全に分けて考えたかったらしい。とはいえ、社会学者の仕事とその生活が全く無関係であるとは考えにくい。Winkinが問題にするのはまさにこの点、ゴフマンの生活と仕事の関係である。Winkinはゴフマンの生活のほんのささいな各場面を15コマ呈示することによってゴフマンの生活的一幕を浮かび上がらせる。ただし、Winkinも指摘するように、知的伝記は往々にしてナイーブで無批判的であり、学問にとって最も基本的に求められる「自省self-reflexiveness」を欠きがちである。恣意的にサンプルを選択することによって、その性格を構築constructしてしまう免れえない側面については自覚的である必要がある。Winkinが生活と仕事の橋渡しとしてあげる5つの戦略は「1. 影響」「2. ハビトゥス」「3. 自叙伝としての仕事」「4. 『ハビトゥス』から『場』へ」「5. エスノグラフィックな歴史としての伝記」である。ここで特記すべきは「2. ハビトゥス」において、アメリカ社会学史上もっとも大きい影響力を持っていた「シカゴ学派」との関連が論じられる点であろうか。ゴフマンもまた「シカゴハビトゥス」なるものを身につけ、その特有の構えdispositionを持っていた。Winkinの論に従えば、そのシカゴハビトゥスは3つの発生上の原理からなる。第1に、「外界outthere」は現実であり、そしてこのことはその社会学的理解において用いられる概念や理論に対して優位であるということ。第2に、世界を見るシカゴの方法においては常に皮肉っぽいねじれが存在するということ。第3に、彼らのスタイルは「クール」であるということである。第1の原理に関しては、ゴフマンの次の文がよい例示となる。「おそらく、その中で子どもたちがみな寒さにふるえている一つの大きな素晴らしい天幕よりも、別々の衣服を一人ひとりにちゃんと着せるほうがよいのだ」（Goffman 1961a: x iv 訳 vi）。Winkinによれば、ゴフマンは彼のフィールドワーク経験の完全なエスノグラフィックな説明を公表しなかったが、彼の基本的な態度はデータ志向data-orientatedであるという。このあたりがB.G.グレイザーやA.L.スト

ラウスらがゴフマンの諸作品をグラウンディド理論grounded theoryの成果として（条件付きで）評価するところであるが、ゴフマンのテキスト構築は一般的なグラウンディド理論を超える著述的な成果を認めることが出来る。それについては後程述べることにする。

Fineもまた、ゴフマンとT.ヴェブレンというこれまであまり結び付けて論じられることのなかった二者を比較対照しながら、彼らの生活史との関連も論じている。Fineによれば、ゴフマンとヴェブレンは「1. メインストリームのアメリカ文化から逸脱したマージナルなスタンス」、「2. 彼らの皮肉、冷笑的な著述スタイル」、「3. ステイタスシンボルについての彼らの著述の中身」、「4. 社会的エリートの美的標準に深く疑念を持っているという彼らの評判の発展」といった点において酷似しているという。そして、彼らの仕事が生きているというその事実は、部分的には両者の似たライフストーリーに由来しているという。一例を挙げれば、ヴェブレンは小さな田舎のウィスコンシンの農家の、ノルウェーからの移民の子として生まれ、ゴフマンはウクライナのユダヤ系の子として生まれた。彼らはメインストリームのアメリカ文化から見れば局外者outsiderであった。そのような彼らの出自、生活が生み出した著述スタイル、伝統的にたいする抵抗、アカデミアの世界に懐疑をもつスタイルを生み出していった。彼らはまた悲劇的な面においても相同性を持っている。ヴェブレンの妻は気が狂ってしまったし、ゴフマンの妻は自殺してしまった。彼らは広く聡明brilliantであると知られているが、同時に「気難しい」ということでも有名であった。

このような生活史との関連でその社会学者の仕事を考えるという研究は（特にゴフマンに関しては）それほど多いわけではなかったが、近年人類学（クリフォード、マーカス、ギアツ）や社会学（マーネン、アトキンソン）の分野でエスノグラフィーの研究の進展とともに徐々にその数を増やしている。事実、組織化と解釈のプロセスを通じた社会的構築物となることから「エスノグラフィックな歴史としての伝記」はブルデューの危惧する「伝記的幻想biographical illusion」の恐れがあるが、そのような伝記を構築する側面に関してはもちろん自省的需要がある。

Fineが示唆するように、ゴフマンの生活史と結びついた様々なスタイルは、テキストを書く上での独特のレトリックをも産み出している。次に考えるのは時に「ゴフマネスク」と称されるそのレトリックについてである。

2. ゴフマネスクとそのレトリック

Fineも指摘するように、社会科学における著述スタイルwriting styleは伝統的に議論の中身にとってはあまり重要ではないと見られて来たが、ここ20年の間、議論を理解する中心として論証的な戦略を重視する方法は力をもちつつある。Fineも引用するGreenの次の言葉は社会理論と著述スタイルについてうまくいいあらわしている。「社会学理論は遍在する社会的プラクティスに属する著述literary活

動の一形態：語を使用する決定的方法における社会生活の同時表現と構築である」(p181-2)。

ゴフマンのその一種独特な著述スタイルはしばしば「ゴフマネスク Goffmanesque」と称される。Fineによれば、ゴフマンの皮肉っぽいユーモラスな著述様式は、オーディエンスを説得させるようにデザインされているという(言うまでもなく、前に論じたことに沿えば、そのような皮肉っぽいユーモラスな著述様式はゴフマンの生活史と密接な関連を持っている)。Traversはゴフマンの「ノンパーソン non-person」のカテゴリーの取り扱いについて検討し、ゴフマンの1953年論文『島の社会におけるつきあい行動』におけるそのカテゴリーの文学的起源について考え、そして非文学的にすなわち社会学的にみせるゴフマンの著述的なあがき literary struggle について解明しようとしている。Traversによれば、ゴフマン自身は決して明示しないものの、ゴフマンの「ノンパーソン non-person (正式に認められない参加者)」の概念は、文学者ジョージ・オーウェルの「アンパーソン unperson」の概念を借用して社会学に持ち込んだものであろうという。前述の「彼の基本的な態度はデータ志向 data-orientated である」という Winkin の記述は当たっているが、ただし、「ノンパーソン」の概念を含め、ゴフマンの様々な概念はデータを媒介せずに生まれてきたものも多い。ゴフマンは「例示的検証と結びついた形で論理的理論産出を行っている」(Grazer & Strauss 1967) 点でグラウンディド理論の成果として部分的に評価されるが、グラウンディド理論が出发点とするデータをかならずしも媒介しない独特のレトリックで読者に対して説得を試みている。

J.ロフランドのヒントからパークの「不協和によるパースペクティブ perspective by incongruity」の概念をゴフマンのそれに適用しているものは Gronfein 論文、Watson 論文である。「不協和によるパースペクティブ」とは、あることばを普通そぐわないように思える場面に適用したり、一見矛盾しあう言葉同士をあえて結び付けたりして、見慣れた事象を別の角度から照射する眺望を獲得する修辭的効果のことを言う。ロフランドによれば、ゴフマンのテキストにおける「不協和によるパースペクティブ」は<不協和な語句 incongruous phrases>と<不協和なモデル incongruous model>という2つのレベルで実現されているという。ここでそのことを詳しく論じる余裕はないが、ゴフマンは独特の「メタファー」と「列挙法」を用いてレトリックを巧みに利用した。

Watsonはゴフマンの特徴的な2つの論証テクニックに焦点を当てる。すなわち最初に概念を提示して次にそれを選ばれた例によってイラスト化する手続き、そしてパーク的な「不協和によるパースペクティブ」によって日々の生活の世俗的な対象を目に見える形にするメタファーの展開である。Watsonによれば、それが読者に例証 illustration の「指示された読み instructed reading」を供給しているという。

だが、エスノメソドロジストの立場からすると、そのようなゴフマンのレトリックに与することが出来ない。「指示された読み」は、そのように再記述された現象の社会成員の内発的な理解を汚すものである、と。もっといえば、ゴフマンのレトリカルなテクニックは「意味をなすこと sense-

making」のある基礎的な問題に触れないままにしているという。次に考えるのはゴフマンの社会学と、同じくミクロ領域を扱うエスノメソドロロジーとの関係である。

3. ゴフマン社会学とエスノメソドロロジーとの関係

ゴフマンの社会学をエスノメソドロロジーの観点から考察しているのがSharrock論文、Watson論文である。Smithも指摘するように、広義において1960年代終わりまでゴフマンとエスノメソドロロジーの創設者ガーフィンケルは同じミクロな社会過程という縄張りで争っていたといえる。その領域はかつてジンメルが通常の社会経験を作り上げること、と呼んだ領域である。

シュッツの現象学的社会学の流れを汲むエスノメソドロロジーの立場からすれば、ゴフマンの社会秩序観はパーソンズやデュルケムに準拠した伝統的なものに見える。現象学的社会学の創始者シュッツは、人々が日常生活の中で用いる「一次的構成概念」と、社会学者が用いる「二次的構成概念」との関係我问うといった社会科学方法論に関する議論を展開した。Sharrockも、「『その内部から』出会われたものとしての日常生活世界」と、「プロの社会学者によって構築された概念的装置」の関係について、エスノメソドロジストのガーフィンケルとサックスはこの違いを明確にしようとしたが、ゴフマンはこの違いについて明確にしなかったと批判する。このような考えはWatsonの次のような問題関心とパラレルであろう。「社会学者達はどうのように観察する現象を記述するのか、そして分析的なレベルにおけるこのような記述がどのようにそのような『全く同じ』現象の社会成員の常識的記述と結び付けられるのか」と。

Sharrockは「状況の定義the definition of the situation」に関してゴフマンをエスノメソドロジ的に批判する。ゴフマンの状況の定義観は、「外在性」、「拘束性」といったデュルケム的な意味での社会的産物としてとらえるものであったが、それにたいしてSharrockは次のような3つの疑問を投げかける。「状況の定義は行為の実践的な条件practical conditionsと結果という点でナイーブさが関わっている」「状況の定義は全く個人的な行為に由来するものであり、それゆえ、定義の『中身』は個人が特異質的に作り出したものであろう」「『状況の定義』はその状況のおおのの特徴の文字どおりそして明示的な交渉がかかわっており、それらはヴァナキュラーにおいて完全にだれでも得ようと努力すれば手に入るup for grabsかのようであり、それゆえ『機械的に続けた』者はいないかのようである」と。これは、「状況の定義」観に関して、ゴフマンのそれは「場の先決性」としばしば言われるようにトップダウンのものが強調されるのに対し、エスノメソドロロジーのそれは行為者の体験のあり方によって現実とは別様に構成されるというボトムアップ的なものが強調される、という違いであると言える。

Watsonはゴフマンのレトリカルな論証discursiveテクニックは「正当と認められない外挿法の誤謬

fallacy of unwarranted extrapolation」とか「世界のゴフマン化the Goffmanizing of the world」という言葉を借りながら社会成員の秩序に対する内発的な理解を阻害するものではないかと示唆する。エスノメソドロジの立場からすれば、社会成員のカテゴリー装置の外部にあるメタファーや列挙法などのレトリックは不満なのであろう。

しかし、すべてのエスノメソドロジストがゴフマンの社会学と全くの一線を画しようとしているわけではない。Smithも指摘するように、エスノメソドロジストのなかにはゴフマンの概念を自分の研究に組み入れようとしている論者もある。また、前述のエスノメソドロジストらが批判する、ゴフマンの分析におけるメタファーの使用と例示の使用については楽天的な展望を持っている論者も多い。それはFine論文、Manning論文、そしてTravers論文にみられるとおりである。

結びにかえて：「ポストモダン」におけるゴフマン

以上、本書におけるゴフマンの生活史的側面（知識社会学的側面）、ゴフマンのレトリック、そしてゴフマンの社会学のエスノメソドロジとの関係についてのテーマを抽出して考察した。ゴフマン解釈については様々な研究が蓄積されているが、これらのテーマは比較的新しい議論であるといえる。そして冒頭で述べたようにこれらのテーマは3つをそれぞれ考察することでお互いが生きてくる。

ゴフマンの生活史とその仕事（テキスト構築）とは密接に結びついている。Manning論文、Winkin論文が指摘するように、ゴフマンは例えばシカゴ学派の経験的なデータを重視する傾向を受け継いでいる。そしてその理論構築の方法はグレイザーやストラウスによって定式化されたグラウンディド理論に類似している。ゴフマンはグレイザー&ストラウスも指摘するように一定の特定の領域の研究を超えて理論的枠組みの展開を目指しているといえる。ただし重要なことにゴフマンは経験的データと理論を対話させる際に、独自のメタファーや列挙法によるレトリックを用いて独自にテキストを構成したという点でグラウンディド理論の方法論とは異なるのである。ゴフマンのレトリックは読者にとって説得の手段として機能している。そのようなレトリックは、ゴフマンと同じミクロ社会学の領域を扱うエスノメソドロジの方法とは相容れない。なぜなら、エスノメソドロジは、人々が日々の生活の中で用いる「一次的構成概念」と社会学者が用いる「二次的構成概念」を区別した上で、人々の意味付けや解釈の過程を通して人々の常識的世界を明らかにしようとするシュッツの現象学的社会学の流れにあるものであるからである。つまりエスノメソドロジは、人々が日常生活の中で用いない外挿的なメタファーなどのレトリックを用いるゴフマンの方法と性質を異にするのである。社会成員のカテゴリー装置と独立したレトリックはエスノメソドロジストにとっては不満かもしれないが、それはゴフマン社会学の欠点というよりはエスノメソドロジとの方法論上の違いとも言うべきものであろう。ゴフマンはエスノメソドロジのような人々の目を通した常識的理解の説明という立場はと

らず（ゴフマンの社会学は一次的構成概念を発見する試みであると主張する論者もいるが）、社会学は社会生活の理念的な説明が避けられないというウェーバーの警告と相同的な新カント派的立場によって現実を一つの価値観点から抽象しようとする学問論にたち、ドラマ、ゲームなどのメタファーを用いてレトリックを発揮した。Manningは、エスノグラフィーに関してゴフマンのかならずしも現実主義realistでない面を取り出してポストモダンのみゴフマンを解釈するのは誤りであるとしているが、このことから、ゴフマンのエスノグラフィーにおいては、現実主義的と言える伝統的な側面と、著述スタイルを重視するポストモダニスト的な側面が共存していると指摘できる。近年、フーコー、デリダ、リオタールらのいわゆるポストモダン思想を背景として、従来の実証主義的・経験主義的研究方法に異を唱える視角を社会学の方法論に取り入れる流れがあるが、ゴフマンにおいて例えばアサイラムなどはナラティブな構築物narrative constructionとして捉えることもできる。その従来の実証主義的・経験主義的手法と異なる手法のひとつがレトリックを巧みに用いる方法である。シカゴ学派の古典となっている『ポーランド農民』に典型であったように、シカゴ学派の1つの魅力は理論とデータとレトリックの一体化においてひとつの物語を語る点にあった。自分の社会学に対してどれほどリフレクシヴであったかは不明であるが、シカゴ学派の影響を受けたゴフマンは意外に伝統的なエスノグラフィー観を持っていたものの、従来の実証主義的・経験主義的研究方法に懐疑的であったという意味で不承不承なreluctantなポストモダニストであったといえる。ゴフマン解釈には様々なものが蓄積されているが、ポストモダンであれそうでないであれ、本書は必ずしも従来の実証主義的・経験主義的ではなく、またミクロ社会学にありがちな「眼の高さ」的な社会学とは違う視点からゴフマン社会学ないしミクロ社会学に対して新たな課題を照射する手がかりを提供してくれる点に意義が認められよう。

参考文献

- Glaser, B.G. and A.L.Strauss. 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies of Qualitative Research*. Aldine. (= 1996 後藤他訳『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Doubleday Anchor. (= 1974 石黒 毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示——』誠信書房.)
- 1961a *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. New York: Doubleday Anchor. (= 1984 石黒 毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常世界——』誠信書房.)
- 1961b *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*. Indianapolis: Bobbs-Merrill. (= 1985 佐藤 毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学——』誠信書房.)
- 1963 *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*. Glencoe, IL: Free Press. (= 1980 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて——』誠信書房.)
- 1974 *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. New York: Harper & Row.

——— 1983 "The Interaction Order: American Sociological Association, 1982 Presidential Address." *American Sociological Review* 48: 1-17.

Lofland, J. 1980 "Early Goffman: Style, Structure, Substance, Soul." in J.Ditton (ed.) *The View From Goffman*, Macmillan: 24-51.

Manning, P.K. 1980 "Goffman's Framing Order: Style as Structure." in J.Ditton (ed.) *The View From Goffman*, Macmillan: 252-284.

(にしかわ　ともゆき・修士課程)